新登録答申文化財概要（三重県）

● 於茂千也函（おもちゃばこ）（伊藤家住宅土蔵）　１件　（四日市市）

【名　　称】 於茂千也函（伊藤家住宅土蔵）　計１件

おもちゃばこ（いとうけじゅうたくどぞう）

【種　　別】国登録有形文化財（建造物）

【所 在 地】三重県四日市市富田

【年　　代】江戸末期／明治前期・昭和前期改修

【建築面積】120 ㎡

於茂千也函（伊藤家住宅土蔵）は、四日市市富田にある、土蔵を改造して郷土玩具を収納・展示している建物です。伊藤家は、江戸時代には網元・鋳物業を生業としていましたが、明治時代に造り酒屋に替わり、当主は代々「吉兵衛（きちべえ）」を名乗るようになります。二代目吉兵衛が郷土玩具を集め、三代目が家業を継ぐと全国的に郷土玩具収集がブームとなったこともあり、収集に拍車がかかります。昭和初期には酒屋を人に譲り、酒蔵を収蔵庫に改修して玩具の展示を行いました。「於茂千也函」は、児童文学者の巌谷小波（いわやさざなみ）が付けた名です。当時、収蔵庫はもう１棟あり、三代目吉兵衛の雅号である「伊藤蝠堂（ふくどう）」から「蝠堂（こうもりどう）」と名付けられ、これらの玩具は、昭和 31 年に「蝠堂民俗玩具」として三重県の有形民俗文化財に指定されました。なお、「蝠堂」は、昭和 34（1959）年の伊勢湾台風で大きな被害を受け、その後の道路拡張・下水道工事に伴って取り壊されたため、玩具は「於茂千也函」に集積されています。

「於茂千也函」の東半は、板間の玩具収納室で、西に次の間、書院付きの奥座敷が続きます。次の間の天井は数寄屋風の凝った作りで、鬼瓦や、奥座敷の釘隠しにコウモリの意匠が使われるなど、玩具集めに興じた趣味人に相応しい数寄屋風座敷蔵として興味深いつくりとなっています。

外観（南から）

コウモリの鬼瓦

玩具収納室

次の間

奥座敷

コウモリの釘隠し

新登録答申文化財概要（三重県）

● かつおの天ぱく主屋　等　２件　　（志摩市）

【名　　称】 **かつおの天ぱく　主屋、作業場**　　計２件

かつおのてんぱく　おもや、さぎょうば

【種　　別】国登録有形文化財（建造物）

【所 在 地】三重県志摩市大王町波切

【年　　代】主屋：昭和 26（1951）年、作業場：昭和 26（1951）年

【建築面積】主屋：54 ㎡、作業場：148 ㎡

かつおの天ぱくは、太平洋を望む大王崎(だいおうざき) にある、鰹節を製造するための作業場と住居です。大王町では鰹節加工が盛んでしたが、現在でも操業しているのは数店となっています。

かつおの天ぱくの敷地の南側は、道路を挟んで海に続く崖となり、東側は一段高い崖となっています。平屋建の主屋は、敷地の北端に建てられています。東側は厨房とクドで、西に仏壇を持つ寝間と居間、４畳間と床のある座敷が続きます。平成 10 年頃、ここに居住しなくなってからは、４畳間は商品の陳列場所、他の部屋は物置として使われるようになりました。

敷地の南東端には、平屋建の「いぶし小屋」と、二階建の「かびつけ小屋」を一体で建て、主屋との間の空間を大屋根で覆って作業場としています。作業場の西端には、カツオを浸け置きする水槽や煮るための煮熟窯(しゃじゅくがま)も設置されています。「いぶし小屋」は、モルタル仕上げの焙乾窯(ばいかんがま)を設置しています。この上にセイロを並べて燻すため、２方の壁がほとんどない開放的なつくりとなっています。一方、「かびつけ小屋」は開口部が少なく、温湿度の調整が必要な「かびつけ」作業に適したつくりとなっています。

かつおの天ぱくは、志摩市大王町の伝統的な産業である鰹節製造の伝統的な工程が現在も行われている貴重な建造物です。

遠景（北東から）

外観（南から）

主屋外観（南西から）

作業場（南西から）

かびつけ小屋　２階

いぶし小屋（北西から）